水平線のムコウ　～Over the Horizon～　元領事のつれづれ話

栃木県国際交流協会　参与　石塚勇人

（第 57 回：2023 年 12 月）

ベルリン滞在記（その 3）

先日、かつて在インド大使館に在勤した当時（2013 年～15 年）の同僚数名と夕食を共にする機会がありました。会合参加者のうち、筆者を含む 3 名はその後インドから米国の総領事館に転勤。筆者は 2019 年 3 月に帰国して退官しましたが、残り 2 名はそれぞれシカゴに 5 年、ロサンゼルスに 7 年在勤して、この 1 年の間に帰国したとのことでした。それぞれ 1 か所の勤務としては外務省員の在外公館平均勤務年数の 3 年を大幅に超えており、思わず「アメリカ生活 5 年以上とは、羨ましい！！」を連発してしまいましたが、よくよく聞いてみると、新型コロナウィルス感染症（COVID-19）が猛威を振るっていた正味 2 年間は、感染対策として出勤するスタッフの人数を制限し、多くのスタッフがテレワークを強いられたため、限られた人数でオフィスワークを回すことになり、かなり厳しい勤務環境だったようです。また、生活面では COVID-19 による感染対策期間中は外出も制限され、スポーツ、コンサート等の娯楽もなければ移動の制限によって旅行もできず、基本的には自宅にいるか職場にいるかのどちらかという状況で、かなりのストレスがかかっていたと話していました。また、感染対策期間中は人事が動かなかったとのことでした。海外生活と言いながら治安以外の理由で外出制限がかかっているのは何とも息苦しいことであり、COVID-19 の 2 年間を差し引いて考えれば妥当な在勤期間だったかも知れないなと思い直しました。

ドイツ人の気質

筆者も、上記の両名ほどではないにせよドイツ勤務は 4 年半に及びました。何の制限もない 4 年半でしたので、思い返せばドイツ生活はそれなりに満喫できたと言えます。

ドイツに着任するまで、ドイツ語圏での生活はもとよりドイツ人との接点もほとんどありませんでした。生活上の心配もありましたが、そんな不安を解消してくれたのがドイツ人の存在でした。日本出発前、妻の親しい友人からベルリン在住で建築家のドイツ人の友人を紹介してもらい、着任後にポツダム広場のレストランでこの方にお会いし、住居、車、日常の買い物などベルリンで生活していく上での様々な情報を得ることができました。また、同じ年の 12 月初旬には子供たちが通う補習授業校で知り合いになっ

た日本滞在経験のあるドイツ人一家にお茶に招かれ、伝統的なクリスマスのお菓子シュトーレンをいただきながらドイツでの生活について諸々の助言をいただいたこともありました。ドイツ勤務のスタートの段階でドイツ人から直接現地の情報に触れることができたことは、ドイツに全くなじみのなかった我々としては心強いものがありました。

ドイツ人については、よく生真面目だとか規則にうるさい、時間を守ることに厳格、おせっかい、個人主義が強く場の空気を読まない、思ったことはすぐ口にする、頑固、旅行好きなど、いろいろ言われています。これらの特徴がドイツ人一般に当てはまるのかどうか筆者には分かりませんが、少なくとも 4 年半のベルリン滞在経験で特徴的だと感じたのは、やはり規則に厳格なことと“おせっかい”なことです。思ったことを口にするのも、規則絡みであることがほとんどです。ある時、交差点の横断歩道の手前で信号待ちをしていたら、自転車道路をこちらに向かって突進してくる自転車から怒鳴り声が聞こえてきました。どうやら、筆者が自転車道路上で信号待ちをしていたようで、「邪魔だからどけ」ということでした。そこまでムキになって怒るほどのことでもないのにと思いましたが、先方からすると歩行者もきちんと交通法規を守れということのようでした。以前、“家のはなし”でも書きましたが、日曜日に家具を組み立てていたところ、「日曜日に大きな物音を立てるとは言語道断、ドイツでは日曜日は静かに過ごすのが習慣だ」とものすごい剣幕で怒鳴り込まれてしまいました。とにかく、彼らは規則や習慣にうるさく、そのことをはっきりと相手に伝えます。もっとも、それによって人間関係が悪くなるかといえばそんなことは全くなく、先方の言い分を理解したことが相手に伝われば、その場は丸く収まります。

“おせっかい”は“親切心”の裏返し

もう一つ、ドイツ人の気質で特徴的な“おせっかい”については、親切心が高じた結果なのだろうと思います。着任の年に会った前述のドイツ人 2 家族は、日本滞在の経験もあり、日本人とドイツ人の違いなどを中心に懇切丁寧にドイツでの生活のノウハウなどを教えてくれましたので、親切なドイツ人を体現していた人たちでした。

“おせっかい”なドイツ人に遭遇したことは何度もありますが、初めて“おせっかい”なドイツ人に出くわしたことは印象的だったのでよく覚えています。ある日、スーパーで買い物をしていた時のこと。各種の塩（Salz）の陳列されている棚の前でどれにしようか迷った末に 1 瓶に手を伸ばしかけたところ、背後から年配の女性がドイツ語で声をかけてきて「その塩は良くない、こちらにしなさい」と別の種類の塩を取って差し出しました。なるほど、ドイツ人の“おせっかい”とはこのことかと思いましたが、とりあえず礼を述べたところ、「他に困っていることは何かないか？」と。別に困っていたわけではなかったのですが、とりあえず小麦粉の薄力粉を買いたいと英語で応えると、売り場まで案内した上で何に使うのかと、またもやドイツ語で聞いてきました。ケーキを

焼くと応えると、「自分でケーキを焼くのか？」と。妻に頼まれたものだと応えると、何種類もある中からこれにしなさいと小麦粉の袋を指さします。ここまで行くと、本当の“おせっかい”で当方としては「放っておいてくれ」と思いますし、「英語を分かっているんじゃないか」とも思いましたが、とにかく丁重に礼を述べてほうほうの体でレジに向かったという顛末でした。おそらく、このドイツ人女性はアジア人が困っていたから助けてあげたということだったのでしょう。他にも、電車の駅や郵便局で案内板を眺めていた時に何度も声を掛けられ、こちらが聞いてもいないのに「どこに行きたいのか」とか「何を送りたいのか」など、事細かに聞いてきてアドバイスしてくれたこともありました。不思議なもので、このドイツ人の“おせっかい”気質に慣れてしまうと、いつの間にか声を掛けられることを当たり前のこととして受け入れるようになっていました。

親切なドイツ人のおかげで助かった忘れられない経験が一つあります。2010 年、クリスマスまで 10 日ほどと年末も押し詰まった土曜日の午前中、妻と自宅から 20 分ほどの繁華街に車で買い物に出た時のことです。交差点の青信号を通過しようとしたところに、反対車線から突然左折車が突っ込んできて筆者の車の左側面前部に激突するという交通事故に遭いました。幸い、低速で走行していたので人命に別状はありませんでしたが車の左側フェンダーは大破、状況は明らかに先方に瑕疵がある事故でした。何とか車を路肩に寄せて駐車しましたが、走行は不可能なほどのダメージ。この日は、気温が零下 15℃と寒さの厳しい日でしたが、車外に出て警察を呼んで事情聴取が始まりましたが、先方が全く非を認めようとしないばかりか、こちらが赤信号に突っ込んできたと言いがかかりをつける始末で、全く埒があきません。しかも、警察官はドイツ語しか話さず、先方の言い分ばかり聞いており形勢は不利な状況に陥りそうな雲行きでした。ガタガタ震えながらの事情聴取で 30 分程が経過したころ、突然背後から一人のドイツ人男性が声をかけてきて「自分たちはあなたの車の後ろを走っていたが、交差点は明らかに青信号だった。証言者になってあげる。」と申し出てくれたのです。この男性も、家族とクリスマスのショッピングに出かける途中だったそうですが、わざわざ自分の車を近所に駐車してまでして事故現場に駆けつけたとのこと。このドイツ人の登場によって事態は一気にこちらの有利に傾きました。その時の心境たるや、「これぞ天の助け」と思ったものです。このドイツ人男性は、別段証言の義務はないにもかかわらず、夫人、子供とともに極寒の中で一緒に現場検証に 1 時間以上も付き合ってくれたばかりか、後日、A4 の用紙にびっしりと書かれた事故の目撃調書を提供してくれたのです。この方の証言のおかげで、その後の事故処理はスムーズに片付き、事故の相手方の保険で車の修理をすることができました。この時ほど親切なドイツ人の有り難味が身に染みたことはありません。それまで、日本人同士ではドイツ人の“おせっかい”気質を酒の席のネタにしていましたが、大いに反省したものです。男性に対して丁重なお礼をしたことは言うまでもありません。

日独 150 周年を迎えた 2011 年

筆者が在勤していた 2011 年は、日本とドイツの間で 1861 年に締結された日・普（プロイセン）修好通商条約から 150 周年という節目の年に当たり、この年はドイツ国内で日本関連イベントが、日本国内ではドイツ関連イベントがそれぞれ様々な形で実施されました。6 月には、当時の皇太子殿下（現在の天皇陛下）が日独修好 150 周年の日本側名誉総裁（ドイツ側の名誉総裁は大統領）としてベルリンを御訪問され大歓迎を受けましたが、御訪問にはその準備から実際の受入れまでを通じて大使館が全館体制を敷いて臨んだ一大行事でした。4 日間のご滞在日程は個別の行事が目白押しでしたが、中でもベルリン日本人学校の御訪問や在留邦人代表との御接見などの行事では筆者もその準備に携わることができましたので、大変感慨深いものがありました。

金春流の能公演を皮切りに、1 年間を通じて大小さまざまな日本関連イベントが切れ目なく続いた 150 周年事業ですが、その目玉は何と言っても 8 月から 2 か月にわたって開催された葛飾北斎展で、富嶽三十六景をはじめ日本でも一か所の美術館では見ることのできないような北斎のかなりの数の作品群が一堂に集められた展覧会で、さすが、欧州の印象派絵画界に大きな影響を与えた北斎の人気は絶大で、開催期間中ドイツ人を魅了し続け、大盛況でした。

振り返ってみれば、3 月に日本で東日本大震災が発災したことで、一時は年間の事業全体がどうなることかと危ぶまれる局面もありましたが、結果的にはドイツ国内で被災国の日本を支援しようという機運が盛り上がったことも手伝ってか、150 周年事業は盛況のうちに幕を閉じました。

この 150 周年事業は文化事業が主体でしたので、当時大使館で領事を担当していた筆者にとっては本来担当外の事業でしたが、あるきっかけからスポーツイベントの企画に関わることになりました。その年の初め、アテネオリンピック以来懇意にしていた日本バレーボール協会女子代表チームの強化責任者だった方と偶さか連絡を取り合う機会があり、その中で翌年にロンドンオリンピックを控え日本代表チームの国際試合を増やしたいということが話題に上り、150 周年というせっかくの機会でもあるので日独の親善試合をやってはどうかという話に発展しました。事はとんとん拍子に進展し、日本側で遠征経費、チームのスケジュール調整などを行い、筆者がベルリン側でドイツの協会関係者と試合開催に関する調整を行うなど奔走した結果、150 周年事業で唯一のスポーツイベントとして日独親善女子バレーボールの開催が実現しました。準備の過程では、東日本大震災により日本代表チームが来独するのは難しいのではないかという瞬間もありましたが、日本側関係者の尽力やドイツバレーボール協会の理解もあって実施に漕ぎつけたという次第です。その甲斐があってかどうか、日本女子代表は 2012 年のロンドンオリンピックで銅メダルを獲得しています。親善試合には、当時ドイツオリンピック委員会会長だったバッハ現 IOC 会長なども観戦に訪れ、大いに盛り上がりました。

イベント実現に奔走したことは、ドイツ在勤中でも特に印象深い思い出として記憶に残っています。

蛇足ですが、東日本大震災は 150 周年という記念の年に暗い影を落とすかに見えましたが、ドイツ国内では発災直後から被災者支援の輪が広がり、ドイツ人によるチャリティ活動は 1 年を通じて続きました。また、150 周年事業との関連はありませんでしたが、同年 7 月にはドイツで行われたサッカー女子のワールドカップで、日本女子代表の“なでしこジャパン”の優勝は日本の存在を強く印象付けることになりました。特に、準々決勝では開催国で優勝候補だったドイツを破ったことはドイツ国内でも大騒ぎになり、決勝のアメリカ戦ではドイツに勝った日本に優勝してほしいという観客が多かったからか、フランクフルトのスタジアムは日本を応援する観客で一色だったことを鮮明に記憶しています。

ベルリンにおける生活は、それまで勤務したどの在勤地と比べても最も穏やかな日常の連続だったように感じます。仕事はそれなりに忙しかったと思いますが、さしたる大事件もなければ邦人が巻き込まれるようなテロ事件もなく、比較的平穏な日々でした。

また、子供たちはそれぞれ大学と高校の受験期でしたが、日本国内のような受験戦争に巻き込まれることもなく、インターナショナルスクールでの学校生活を謳歌していました。学校では、年に何回かのスクール・トリップ（日本の修学旅行に該当）で近隣の欧州諸国への旅行、アフタースクール・アクティビティ（部活）、イベントの開催などで忙しく、週末も含め日常で親と行動を共にするという生活パターンではなくなりつつありました（もちろん、送迎は親の義務として行っていましたが…）。学費の支払いに汲々としていたこともあって、お金のかかる家族旅行は年に一度、2 月のウィンターブレイク（冬休み）を利用した 1 週間のスキー旅行のみと決め、毎年オーストリアの南チロル地方に出かけていました。したがって、普段の生活サイクルは子供の学校のスケジュール中心でした。今になって思えば、無理をしてでもドイツ国内や欧州をもっと旅行していればとも思いますが、当時はそれも止むなしとしていて、1 年のほとんどはベルリンで過ごしていました。筆者の個人的な日常は、月に 2～3 回のゴルフと週に 3～4 回のスポーツジム通い、偶の週末に近所の湖の周囲を散歩するぐらいという平凡なものでしたが、それでも霞が関での勤務と比べれば満員電車の通勤地獄も深夜の残業もなく、周囲を緑に囲まれたベルリン郊外の生活は何にも代えがたい貴重なものだったと、今更ながら思います。ベルリンを離任してから 5 年半後の夏、はるばる NY からフランクフルトに飛んでライン川クルーズ、ハイデルベルク、ノイシュバンシュタイン城（白鳥城）、さらにはオーストリア、イタリア、スイス、フランスなどをレンタカーで 2 週間かけてめぐりましたが、あらためてドイツや欧州各地の自然の美しさに触れ、在勤中にやり残したロマンチック街道めぐりも実現し、少しだけ帳尻を合わせた気がしました。

今年の投稿はこれで終わりますが、2023 年はパレスチナでの戦闘、長引くロシア・ウクライナ戦争、世界の分断と安全保障、地球温暖化による記録的猛暑、ポストコロナの世界的な物価高と格差の広がり、生成 AI の発展等々、様々なニュースが駆け巡りました。次回のコラムでは、この激動の 2023 年を振り返って考察してみたいと思います。

では、皆さま、どうぞ良いお年をお迎えください。

おわり

（公財）栃木県国際交流協会　参与　石塚勇人（略歴）
1977 年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の 9 公館で計 29 年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に 2019 年 3 月退官。同年 5 月より現職。